

指導助言者	(公財)日本中学校体育連盟	副会長	平本浩実
	岩手県中学校体育連盟	研究専門部副部長	江六前仁史
司会者	岩手県中学校体育連盟	副会長	小林智
運営責任者	秋田大会実行委員会	運営部員	小森博喜
(記録)			

中体連主催大会 すべての見直しを図る

山口県中学校体育連盟 理事長
山口市立白石中学校 茗荷谷 武 弘

〈提案要旨〉

平成30年度に開催した全国中学校体育大会（山口県開催4競技）の準備を進める中、西日本豪雨、記録的猛暑、台風による影響の発生、そして部活動ガイドラインや働き方改革の見通しが示され、部活動や中体連の在り方に関する見直しが急務な課題として山積した。

今回は、大会の見直しを中心に山口県中学校体育連盟（以下「県中体連」）の取組を示し、中体連の在り方に関して検討する一助としたい。

1 はじめに

県中体連は、支部長会、理事会、15の支部中体連（山口県19市町）19の競技専門部で構成している。会議は、4月に総会、8月と2月に理事会、1月に支部長会を定例で開催している。主催大会について、他県にない特徴としては、山口県体育大会（以後「秋季県体」）と山口県中学校春季体育大会（以後「春季県体」）があげられる。秋季県体は、県中体連が発足するきっかけとなったメイン大会であり、3年生最後の大会と位置付けている。また、春季県体は、選手の県体出場機会を増やす目的で東部と西部に分けて開催され、いずれも長きにわたる伝統的な大会と言える。しかしながら、全国中学校体育大会（以下「全国大会」）や中国中学校体育大会（以下「中国大会」）の発展により、山口県中学校選手権大会（以下「県選手権大会」）と秋季県体に対する位置づけが徐々に変わってきた。この状況に県選手権大会の熱中症対策等による予算確保、部活動ガイドラインや働き方改革等の要素が加わり、全大会の見直しが必須となった。

今回は、まだ見直し半ばではあるが、令和5年度の完全実施を目指し平成28年度から始めた取組や方針等について紹介したい。

2 中体連が主催する大会及び課題

月	大会名(略名称)	課題 等
4	春季県体支部予選	●東部・西部県体申込の為、支部予選が4月第2週末の開催。顧問の転勤、年度初め業務過多の中で練習も不十分な状態での開催。
5	春季県体(東部 西部)	●東部・西部県体は学校行事(修学旅行、定期テスト等)の関係で5月第3土曜日とその翌日に固定。 ●選手が県体へ出場できる機会を増やす目的で、東部・西部に分けて開催。67年の歴史。
6	選手権大会支部予選	●県選手権大会までの期間、学校行事、天候等を考慮し、各支部6月1～2週週末の開催。
7	県選手権大会 各支部夏季体育大会(秋季県体予選)	●県選手権7/20～28日、秋季県体予選7/28～31、中国大会8/1～10の超過密日程。
8	中国大会 全国大会	●秋季県体予選において、熱中症搬送が多発。しかし、過密日程のため会期の延長が困難。 ●台風による、中止、延期が発生。

10	秋季県体 支部新人大会	<ul style="list-style-type: none"> ●かつては、総合開会式、支部対抗を実施。県中体連のメイン大会。72年の歴史。 ●県民総参加運動として山口県体育大会に秋季県体を組み込む。主催は山口県。 ●3年生を10月まで活動させることの難しさ及び県新人大会として開催したい意見は長期にわたり、議論されてきた。
----	----------------	--

3 経過

(1) 第1期(平成28年度～平成30年度総会 提案)

平成28年度は準備期間として諸会議での情報提供、平成29年度理事会(8月)から「大会規模の見直し」について検討事項として事務局提案を開始し、支部長会と理事長会(2月)での検討を得て、平成30年度総会での方向性の決定・意思統一を目指した。しかしながら、酷暑による熱中症対策や部活動支援員の監督・引率の導入といった急を要する課題が発生したこと、部活動ガイドラインの「適切な休養日」に関心が集中したこと等から、「大会規模の見直し」についての検討は深まらなかった。平成30年度総会では、7月末の熱中症対策として超過密日程の見直しについても提案したが、最終的に熱中症対策は講じるが「現行どおり実施」で承認された。

この期間の結果としては、部活動支援員の監督・引率の導入と、全国大会の引率のない教員役員を出張扱い(旅費別途)※1にすることについて教育委員会より承諾を得られたことが大きな見直しとなった。また、今後の部活動ガイドライン関係の対策を見通し、全中学校・全運動部活動顧問に1年間で出場した全大会の調査を実施した。

※1 現在まで、職専免で、保険は県中体連負担。

(2) 第2期(平成30年度総会～平成30年度臨時総会 継続審議)

平成30年度総会の結果を受け、理事会(8月)において「大会の見直し」を検討事項として再度提案。その後、支部長を中心に課題検討会議を開催し、春季県体の日程、秋季県体の在り方、部活動に関する休養日に関して具体策を示すことができるように検討を重ねた。あわせて、支部長会と理事会(2月)を臨時総会に変更して招集し、方向性の承認を得ることを目標とした。

臨時総会で、春季県体支部予選の日程を4月末に移すため、春季県体の申込締切日・プログラム編成会議等の日程の変更等について提案したが、困難として「否認」となった。熱中症対策においては、秋季県体予選において熱中症搬送が多発したため、「大会の見直し」を待たず、会期の日程を含め対策を先行実施することで「承認」を得た。

また、支部長会の働きかけで、県内の中体連が主催する大会においても引率のない教員役員を出張扱い(旅費別途)にすることが決定した。

(3) 第3期(令和元年度臨時支部長会～令和2年度総会 採決)

部活動ガイドライン、教職員の働き方改革、令和3年度から学習指導要領の完全実施等の条件も重なり、「大会の見直し」については県中体連独自には進められないと判断し、臨時の支部長会を重ね、山口県中学校長会へ正式に提案し協力を得ることとした。令和元年度の総会で次のように方向性を提案し、年度末を臨時総会に変更し、採決することとした。

方向性の提案

令和5年度から春季県体を廃止

令和4年度から秋季県大会を「秋季県新人大会（仮称）」として開催
県選手権大会、選手権支部予選の規模・日程等の見直し

山口県校長会への提案後は、県内中学校への周知やあらゆる視点からの指摘を得られ、課題解決に向けての対応が迅速かつ的確にできるようになり、県内教職員への課題共有も進んだ。あわせて、山口県学校安全・体育課、山口県観光スポーツ課、公益財団法人山口県体育協会、山口県高等学校体育連盟、山口県高等学校野球連盟との打ち合わせを重ね、理解を得ることができた。山口県校長会及び関係団体の御理解と御協力に、たいへん感謝している。

県中体連としては、支部長が支部内中学校長、支部理事長が支部内中学校、各競技専門委員長が各競技専門委員の意見の集約を行い、課題の洗い出しを行った。支部内校長は「理解」、支部内学校と各競技専門部は「概ね理解」の結果となった。

残念なことに、2月の臨時総会が新型コロナウイルス感染拡大のため会議は中止となった。「大会の見直し」については全中学校へ提案と説明資料の配布ができ、課題の共有がさらに進むことになったことは良かった。令和2年度の総会も集まっての会議は開催できず、書面決議として採決を実施して方向性の提案どおり「承認」された。反対意見については今後の課題として取り組むことを確認した。

新型コロナウイルス感染拡大の影響が5月いっぱいまで続き、大会の中止が相次いだこともあるが、子どもたちの通常の学校生活を取り戻すことに全精力をそそぐこととなった。現在は、秋季県体と秋季県体予選を「3年生の活動の場の確保（救済大会）」と位置づけ、山口県教育委員会の協力を得ながら開催に向けて準備を進めている。

4 今後の取組と課題

(1) 県選手権大会の見直し

熱中症対策は、「大会の見直し」を待たず先行実施にしたことから、出場枠を変えずに主に会期の延長で対応しているため、施設費や役員費は増加している。また、競技によっては1日1試合の原則が示される等、各競技団体が示す熱中症対策もあることから、開催規模、開催時期の検討が必要となる。出場枠の見直しを行う場合は、予選大会の見直しも必要となる。増加する予算については、令和5年度以降は、春季県体の廃止に伴い発生する予算を充当する。

(2) 県新人大会開催の準備

これまでも支部新人大会は開催しているため、県新人大会の開催規模、開催時期の検討が必要となる。秋季県体よりは規模が縮小する見込みで、予算については秋季県体の予算を充てるため問題はない。ただし、競技団体が県新人大会及びその上位大会を主催している場合もあり、日程や施設の調整は難航する恐れもある。本大会においては、中体連の上位大会が無いこと、大会の精選につながる事等から各競技団体との共同実施も考えられる。

(3) 秋季県体予選の見直し

これまで、3年生最後の大会の位置づけで7月末に実施していたが、秋季県体が秋季県新人大会となるため、予選を開催する必要がなくなる。各支部に判断を委ねることとなるが、超過密日程となってい

たことや毎年猛暑の中で大会運営がつづいていること等を考慮すると、選手・役員の負担を考え中止となる可能性が高い。

その場合3年生最後の大会が6月1週目となるため、選手権大会予選の会期を含めた検討が必要となる。

(4) 大会の精査

運動部活動の在り方に関する方針（山口県教育委員会）では、学校単位で参加する大会等の見直しとして次の内容が定められている。～要約～

- 県中体連は、学校の運動部が参加する大会・試合の全体像を把握
大会等の統廃合等を主催者に要請
- 運動部が参加する大会は、中体連の主催もしくは共催する大会
それ以外は、「国のガイドライン」の趣旨を踏まえ各学校において定める。

現在、平成30年度に実施した全中学校・全運動部活動顧問に1年間で出場した全大会の調査結果をもとに一覧表の作成をめざし内容を精査している。膨大な量となりデータベースの作成に時間を要しているが、各競技専門部を中心に各競技団体等との連携も強化し見直しを行う。

5 おわりに

70年にも及ぶ大会を見直すことはどのような意見が出るかも想像できず、正直、不安が多かった。しかし、他団体においても多くの大会が開催されている現在においては、大会数は間違いなく過多である。ゆえに、中体連として自らも主催大会を見直し、全競技の大会すべての見直しについて着手することとした。実際に、コロナ禍では、主催団体がはっきりとしない大会は一切開催できなくなっており、大会精選を進める大きなチャンスとなる可能性がある。

令和5年の完全実施に向けて取り組んでいる。

岐阜県中学校体育連盟主催大会における大会の運営について

～「専門性」の具体数から考える大会運営の在り方～

岐阜県中学校体育連盟 調査研究委員長

羽島市立中央中学校 熊崎 敦子

〈提案趣旨〉

今年度、本県開催予定だった4種目のうち、新体操専門部に身を置く立場として、専門性の高い教員が運営に携わる競技種目と、専門でない教員が大会運営に携わる競技種目との差が大きいことに課題を感じた。そこで「専門性」を具体的に数値化することで、専門性のある教員がいないことによる負担感を視覚化し、大会運営の役員配置や専門性をどう補っていくかを考える機会としたい。

1 はじめに

岐阜県には185の中学校があり、24の郡市大会、6つの地区大会の予選大会を経て、県大会が開催される。その中で部活動設置数や競技人口、チーム編成等の問題で、その全ての競技の予選を郡市大会から開催できているわけではない。とくに、水泳や体操・新体操等がそうである。年々、地域によって部活動が抱える問題の差は大きくなり、地区によって生徒数や部活設置の減少が進み、複数校合同部活動の在り方や顧問の配置、大会運営に至っても大きく影響が出てきている。

どの部活動の顧問を受け持つかについては、基本は本人の実績や経験をもとに配置される。専門種目の部活動はもちろん、専門部活の設置はあるが、専門外の部活を持つことも少なくない。また、専門種目の部活が設置されていないこともあり、必ずしも専門種目を顧問するということはない。さらに、本県は小学校と中学校の両校の行き来が可能であり、場合により自分の意志とは関係なく、専門性の高い教員が中体連大会や運営から離れてしまうこともある。

今年度、本県は東海ブロック開催となる全国中学校体育大会の4種目（軟式野球、ハンドボール、新体操、剣道）を開催予定だったため、時間をかけて各県の大会視察を進めながら、専門委員長を中心に大会運営に準備を進めてきた。その中で、他県でも新体操の大会運営には専門性のある教員が少なく、大会運営にかなり苦勞されていた。

岐阜県では、相撲や水泳、体操・新体操競技などは、学校における部活動の設置がない場合が多い。そのため、大会参加のための臨時顧問が位置付けられ、大会引率や運営に当たることもある。よって運営に関わる役員の専門性が必ずしも保証されず、役員数の確保や大会運営にかかわる役員配置の難しさを感じてきた。これらの種目に関わる審判員などの専門性は連盟・協会に所属している一般の方の協力が欠かせない現状がある。

そこで、教員が有する種目の「専門性」について、これまで漠然と少ないと感じているものについて、具体的な数値を調べ、人材不足を具体的にした上で、それぞれの種目を専門とする人材の発掘と活用、年代による専門性の見通しを持ち、これからの大会運営に活かしていきたいと考えた。

2 調査方法

今回、岐阜県全中学校において、部活動全顧問を対象に、以下の項目でアンケート調査を実施した。県下の中学校185校のうち、回答数は180校、回答率は97.2%であった。

- ① 各校における部活動顧問の「専門性」の調査
各校の部活動顧問のうち、
年代別 (20代、30代、40代、50代以上) に
(a)自身が専門種目の部活動顧問をしている。
(b)自身が専門種目でない部活動顧問をしている。
(b-1)自身が専門性を発揮できる部活動が設置されているが、専門外の顧問をしている。
(b-1①)自身が専門ではないがその指導がある程度できる部活動顧問をしている。
(b-1②)自身が専門でない上に、指導に自信がない部活動顧問をしている。
(b-2)自身が専門性を発揮できる部活動が設置されていないために、専門外の顧問をしている。
(b-2①)自身が専門ではないがその指導がある程度できる部活動顧問をしている。
(b-2②)自身が専門でない上に、指導に自信がない部活動顧問をしている。
上記の調査項目を実数で回答する。(b)については、自己申告となる。
- ② 各校における教員の「専門性」の調査 → 各校の教職員で、専門として指導可能な競技種目
・「部活動の顧問」というしほりを外した調査ができる。
・専門ではないが、指導がある程度可能な種目も含む。
・自身が現在顧問をしている部活以外で指導可能な種目があれば、その種目に回答できる。

調査対象種目については、全中夏季大会種目にある下記記載の16種目で行った。

陸上競技、水泳競技、バスケットボール、サッカー、ハンドボール、軟式野球、体操競技、新体操、バレーボール、ソフトテニス、卓球、バドミントン、ソフトボール、柔道、剣道、相撲

- ③ 各種目の大会運営に当たった役員数
令和元年度の岐阜県中体連県大会の教員役員、一般役員 (連盟・協会等) の数を集計し、比較をする。以上のアンケート結果の数値を年代別、項目・種目別に集計し、「専門性」について考察した。

3 調査結果

(1) 部活動顧問の年代別構成人数 (令和元年度)

	合計
学校数 (校)	180
20代 (人)	802
30代 (人)	★839
40代 (人)	▼531
50代以上 (人)	601
計 (人)	2773

岐阜県下中学校全体の顧問構成を年代別で見ると、20代、30代の顧問数が40代、50代より上回る。ほとどの地区でも40代が最少であった。これは学校を離れた教育機関への転勤や、管理職に当たることの影響があると推測する。20代、30代では役員として大会運営を支えながら経験を積み、運営に携わる知識やノウハウ、専門性を習得した上で、30代、40代で専門種目の大会運営の中心となって貢献できる人材を確保していくことが理想である。しかし、20代の顧問総数が30

代を下回っていること、今後、教員採用数の減少も加わると種目の専門性が磨かれる世代数の減少が予

想され、人材確保が難しくなっていくことが予想される。

(2) 顧問の「専門性」の具体

次の表は、各校で配置された部活動顧問について、専門種目の顧問であるかどうかや、専門種目の顧問でない場合、「専門の部の設置有無」「指導可能かどうか」について、具体的に数値化したものである。

項目 種目	大会運営 必要役員数	a 専門	割合 %	指導可 a+(b-1①)+(b-2①)		専門外・指導可 (b-1①)+(b-2①)		専門外・指導自信無 (b-1②)+(b-2②)		合計
				数	割合(%)	数	割合	数	割合(%)	
1 陸上競技	162	96	41	142	60.7	46	19.7	92	39.3	234
2 水泳競技	85	11	20	22	40.0	11	4.7	33	60.0	55
3 バスケットボール	103	199	50.3	255	64.4	56	23.9	141	35.6	396
4 サッカー	65	112	57.4	138	70.8	22	9.4	61	31.3	195
5 ハンドボール	58	27	36.5	34	45.9	7	3.0	40	54.1	74
6 軟式野球	121	174	68.2	207	81.2	33	14.1	48	18.8	255
7 体操競技	42	1	20	1	20.0	0	0.0	4	80.0	5
8 新体操	29	0	0	1	33.3	1	0.4	2	66.7	3
9 バレーボール	142	124	35.2	213	60.5	89	38.0	139	39.5	352
10 ソフトテニス	66	142	40.5	203	57.8	61	26.1	148	42.2	351
11 卓球	36	93	30.3	157	51.1	64	27.4	150	48.9	307
12 バドミントン	17	29	25	63	54.3	34	14.5	53	45.7	116
13 ソフトボール	31	26	27.7	61	64.9	35	15.0	33	35.1	94
14 柔道	55	31	43.7	39	54.9	8	3.4	32	45.1	71
15 剣道	77	99	48.3	118	57.6	19	8.1	87	42.4	205
16 相撲	32	0	0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	1

県中体連各専門部の大会運営には、現状として「(a) 専門種目の部活動顧問をしている」教員がおもに携わっている。上図から、バスケットボール、サッカー、軟式野球、ソフトテニス、卓球、バドミントン、剣道の7競技種目については、「(a) 専門種目の部活動顧問をしている」教員で大会を運営することが可能であることが分かった。一方で、陸上競技、水泳競技、ハンドボール、体操競技、新体操競技、バレーボール、ソフトボール、柔道、相撲の9競技種目では、「(a) 専門種目の部活動顧問をしている」教員で大会を運営することが難しく、「(b) 専門外であるが、ある程度指導が可能である部活動の顧問をしている」教員の力を借りて大会運営を成立させている現状である。さらにその中でも水泳競技、体操競技、新体操競技、相撲の4競技種目については、指導への自信に関わらず大会運営に携わらなければ大会自体が成立しない状況であることも分かった。

(3) 令和元年度県大会役員数と指導可能な部活動(複数回答可)

項 目	大会運営の必要役員数			指導可能な 部活動合計	項 目	大会運営の必要役員数			指導可能な 部活動合計
	教員	一般	合計			教員	一般	合計	
1 陸上競技	73	89	162	272	9 バレーボール	127	15	142	358
2 水泳競技	45	40	85	135	10 ソフトテニス	66	0	66	342
3 バスケットボール	78	25	103	369	11 卓球	29	7	36	249
4 サッカー	65	0	65	252	12 バドミントン	16	1	17	185
5 ハンドボール	40	18	58	94	13 ソフトボール	31	0	31	215
6 軟式野球	111	10	121	448	14 柔道	18	37	55	96
7 体操競技	12	30	42	15	15 剣道	77	0	77	199
8 新体操	2	27	29	6	16 相撲	7	25	32	12
					合 計	847	303	1150	

「指導可能な部活動」は、「専門ではないが、指導がある程度可能な種目」について、複数回答で集計した。

先述した「(b) 専門外であるが、ある程度指導できる部活動の顧問をしている」教員も含めて大会運営を行っていた9種目のうち、陸上競技、水泳競技、ハンドボール、バレーボール、ソフトボール、柔道の6競技種目では、この調査においては大会運営の必要役員数を満たすことが分かった。ただし、複数回答であることや、顧問をしている部活の大会等の兼ね合いもあるので、これで大会運営にゆとりが生まれるわけではないが、興味深いデータである。

体操競技、新体操、相撲の3競技種目については、現状では連盟や協会の力を借りないと大会運営自体が立ち行かなくなることが分かった。

4 結果から

- ・年代別の調査では、現在の各種目に関わる年齢構成が分かり、今後の大会運営や競技役員の見通しをもつことができた。
- ・これまで漠然と種目の専門性の数に偏りを感じていたが、具体的な数字にすることによって、種目毎の大会運営の負担感を数値化し、そこから専門性をどう補えるかを考えることができた。
- ・「専門種目」の顧問数と大会の役員数と比較すると、種目によって圧倒的に足りない現状が分かった。
- ・「指導可能な部活」の数は、予測していた数値より多く、どの種目も大会運営の必要役員数を上回っていた。
- ・本来の専門性を発揮できるはずの教員が、他種目の顧問を受け持ち、埋もれてしまっている数をつかむことができた。

5 今後について

① 小学校教諭への「専門性」の調査の実施

一時的に小学校へ勤務をしている職員の数の把握と同時に、専門性の高い新たな人材の調査を行い、専門種目への協力を求めていく。

② 校種外への教員への依頼体制の確立（小体研や高体連との連携）

岐阜県は小学校、中学校の校種間の行き来があり、専門性の高い教員が小学校に勤務することがある。また、種目によって高等学校勤務の教員に大会役員の依頼ができるようにしたい。またそれに伴う報酬等、待遇の改善を図りたい。

③ 種目以外の大会役員依頼についての待遇の改善

専門種目ではない顧問をしている教員に対して、担当の大会役員に加えて依頼をすることになる。別種目に従事した教員に対しての待遇の改善を図りたい。

④ 教員の「部活動専門種目」の定期的な調査の実施、人材発掘のためのデータ集計の継続と活用

今回の調査により、「専門性」の具体数が分かり、そこから種目の負担感や大会運営の役員の配置などを考える参考になった。今後も調査を定期的の実施し、専門性のある教員はもちろん、別の部活動顧問に従事する専門性のある教員の数を拾い上げて把握をし、大会運営に活用していけるようにする。

6 さいごに

今回の調査研究で、岐阜県の大会運営の実情を他県に知ってもらうことができた。今後、競技運営において、専門性に負担の大きい種目では、他県から帯同審判のような形で、役員等を補充することで大会運営をより充実できるような動きを検討できたらと思う。

岩手の部活動のあり方を考える

～より良い部活動のあり方を考えるアンケート調査より～

岩手県中学校体育連盟 研究専門委員長
盛岡市立城西中学校 小畑 修也

〈提案趣旨〉

スポーツや文化活動に親しむ学校外の受け皿に地域格差がある本県において、部活動は無償でスポーツや文化活動に親しむことができる貴重な機会であり、体力の向上や健康の保持増進、豊かな人間性を育む場となっている。しかし、生徒数の減少や教職員の多忙化など持続可能で望ましい部活動の実現に向けて解消しなければならない課題も多い。そこで、今後の部活動のあり方について考えるためにアンケート調査を実施した。

1 「より良い部活動のあり方を考える」アンケートの実施

本県では、平成30年3月にスポーツ庁より示された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」に則り「岩手県における部活動の在り方に関する方針」を策定している。各市町村・学校でもそれに準じたガイドラインを定めて部活動を実施しており、アンケート調査（令和元年7月～11月実施）を通してその実情の把握を行った。

① 調査対象

県内抽出校（県内162校中80校）の中学2年生（回答4858人）と部活動顧問の教職員。（回答966人）

② 調査内容（アンケート項目）

生徒	・所属部 ・部活動以外の活動の有無 ・大会やコンクールの数について ・部活動に望むこと	・部活動時間について ・部活動で身につけたい力 ・部活動が無くなると困ること	・休養日について ・部活動での悩み
顧問	・指導している部 ・大会やコンクールの数 ・部活動を学校が主導で行うことについて ・部活動を有意義にするために望むこと	・部活動時間について ・部活動で身につけさせたい力	・休養日について ・指導の際に困っていること

③ 集計方法

岩手大学人文社会学部 浅沼道成教授の指導のもと岩手大学大学院修士課程総合科学研究科地域創生専攻スポーツ健康科学プログラム浅沼研究室 鈴木綾華氏に協力を仰ぎ、情報を共有して集計を行った。

2 アンケート結果について

①「運動部に所属している生徒」②「運動部に所属し、地域のスポーツクラブ等にも参加している生徒」③「文化部に所属している生徒」④「文化部に所属し、地域で合唱や楽器などの習い事も行っている生徒」の4つのグループに分けて集計した。生徒は①②に該当するものを、顧問は運動部の指導を行っているものを結果に示している。

① 部活動の時間について (生徒・顧問回答)

(岩手県の部活動方針 長くとも平日2時間程度、学校の休業日は3時間程度)

平日の部活動	短い	少し短い	丁度良い	少し長い	長い
運動部生徒	17.5%	20.1%	48.3%	9.8%	4.4%
運動部顧問	15.4%	25.2%	47.9%	7.2%	4.2%
土日の部活動	短い	少し短い	丁度良い	少し長い	長い
運動部生徒	8.2%	10.1%	54.8%	18.0%	8.9%
運動部顧問	5.0%	8.2%	71.4%	9.3%	6.1%

② 休養日について (生徒・顧問回答)

(岩手県の部活動方針 週当たり2日以上〈平日1日以上、週末1日以上〉の休養日)

平日の部活動	休まず活動したい	毎週1回は休みたい	大会前やシーズンにより調整してほしい	2日以上は休みたい	
運動部生徒	14.9%	40.5%	34.8%	9.8%	
運動部顧問	3.5%	59.8%	31.2%	5.5%	
土日の部活動	休まず活動したい	月2回程度休みたい	毎週1回は休みたい	大会前やシーズンで調整	休日は休みたい
運動部生徒	10.4%	11.5%	37.0%	31.8%	9.2%
運動部顧問	5.0%	9.6%	47.8%	34.1%	8.0%

現行の部活動が適正であるという回答が多い。平日の部活動時間については生徒・顧問とも「短い」「少し短い」という回答も少なくない。休養日については「大会前やシーズンにより調整してほしい」というニーズも多い。実際、冬場は活動時間が短い学校が多く、生徒・顧問ともに柔軟な活動時間の確保を求めていることが分かる。

③ 大会やコンクールの数について (生徒・顧問回答)

	少ない	やや少ない	丁度良い	やや多い	多い
運動部生徒	16.9%	18.9%	53.6%	7.8%	2.7%
運動部顧問	1.7%	6.2%	55.1%	23.2%	13.7%

種目による偏りはあるが、丁度良いと感じている生徒・顧問の回答が多い。傾向として、生徒は「もう少し大会やコンクールに出場したい」反面、顧問は「大会やコンクールが多すぎる」と負担に感じているようである。

④ 部活動で身につけたい・身につけさせたい力 (生徒・顧問回答 複数回答可)

	運動部生徒	運動部顧問
夢や目標に向かって努力する力	④ 55.3%	④ 74.5%
体力、競技力、技術の向上	① 87.5%	63.9%
あいさつや礼儀、モラル・マナーなどの社会性の向上	③ 61.0%	① 90.0%
周囲と上手に人間関係をつくる力	48.3%	③ 75.1%
思いやり、やり切る力、感謝の心など人間性の向上	② 63.3%	② 82.0%
生涯に渡って長く続けていきたい	14.0%	27.6%
部活動で身につけたい力は無い	3.2%	1.4%
その他	1.3%	1.1%

生徒・顧問共に部活動で様々な力を身につけたい・身につけさせたいと感じている。生徒は「部活動を通して体力や競技力を伸ばしたい」との回答が多く、顧問は部活動を通して「社会性や人間性の向上」を目標としていることが分かる。

⑤ 部活動に望むこと (生徒回答 複数回答可)

	運動部生徒
十分に活動できる施設や場所がほしい	① 38.1%
十分に活動できる部員数がほしい	22.1%
十分に活動できる時間がほしい	22.6%
他校との練習試合や練習交流会をもっと行いたい	② 32.8%
専門的な指導が出来る指導者や効果的な練習メニューがほしい	④ 27.8%
自分にあった選択が出来るよう、部活動の種類を増やしてほしい	17.3%
今の部活動に満足している	③ 28.1%

⑥ 部活動が無くなると困ること (生徒回答 複数回答可)

	運動部生徒
自分のやりがいや、楽しみにしている時間が少なくなる	② 42.0%
スポーツを行う機会が少なくなる	① 44.8%
自分の力を試す場が少なくなる	③ 39.8%
友達や仲間との交流の機会が少なくなる	35.1%
先生や指導者との交流の機会が少なくなる	13.9%
人間性を高めるなど、自分を成長させる機会が少なくなる	④ 37.3%
特に困らない	14.2%

⑤⑥については生徒を対象としたアンケート結果である。生徒の多様なニーズが伺え、特に活動場所等で苦慮している様子が分かる。また、部活動が無くなるとやりがいや楽しみ、スポーツを行う機会が減って困ると回答する生徒が多く、特に沿岸部や山間部の学校の生徒はその傾向が顕著であった。

⑦ 部活動についての顧問の考え (顧問回答)

	現行通り行いたい	活動時間や休日、指導者などを工夫しながら学校で行いたい	学校と切り離し、社会体育施設等で行ってほしい	部活動は学校と切り離れた方がよい	わからない
顧問	11.1%	48.1%	19.8%	19.1%	1.9%

⑦は顧問を対象に「今後の部活動についての考え方」を調査したものである。県全体では表の通りであるが、沿岸部や山間部の学校では学校主導での部活動推進を望む回答が7割強と多く、生徒にとって部活動が必要であることが分かる。

⑧ 指導で困っていることや大変なこと (顧問回答 複数回答可)

	顧問
多忙で、自分や家族の時間が持てない	① 50.6%
大会やコンクールの引率が多すぎる	21.9%
大会成績などのプレッシャー	11.0%
部活動での生徒指導に負担を感じる	19.1%
部活動での技術指導の負担を感じる	② 42.3%
保護者会やスポ少活動など、部活動以外に関わらなければならない活動が多い	27.6%
保護者やコーチ、外部指導者などとの良好な関係作り	④ 29.8%

生徒・顧問共に部活動で様々な力を身につけたい・身につけさせたいと感じている。生徒は「部活動を通して体力や競技力を伸ばしたい」との回答が多く、顧問は部活動を通して「社会性や人間性の向上」を目標としていることが分かる。

⑤ 部活動に望むこと (生徒回答 複数回答可)

	運動部生徒
十分に活動できる施設や場所がほしい	① 38.1%
十分に活動できる部員数がほしい	22.1%
十分に活動できる時間がほしい	22.6%
他校との練習試合や練習交流会をもっと行いたい	② 32.8%
専門的な指導が出来る指導者や効果的な練習メニューがほしい	④ 27.8%
自分にあった選択が出来るよう、部活動の種類を増やしてほしい	17.3%
今の部活動に満足している	③ 28.1%

⑥ 部活動が無くなると困ること (生徒回答 複数回答可)

	運動部生徒
自分のやりがいや、楽しみにしている時間が少なくなる	② 42.0%
スポーツを行う機会が少なくなる	① 44.8%
自分の力を試す場が少なくなる	③ 39.8%
友達や仲間との交流の機会が少なくなる	35.1%
先生や指導者との交流の機会が少なくなる	13.9%
人間性を高めるなど、自分を成長させる機会が少なくなる	④ 37.3%
特に困らない	14.2%

⑤⑥については生徒を対象としたアンケート結果である。生徒の多様なニーズが伺え、特に活動場所等で苦慮している様子が分かる。また、部活動が無くなるとやりがいや楽しみ、スポーツを行う機会が減って困ると回答する生徒が多く、特に沿岸部や山間部の学校の生徒はその傾向が顕著であった。

⑦ 部活動についての顧問の考え (顧問回答)

	現行通り行いたい	活動時間や休日、指導者などを工夫しながら学校で行いたい	学校と切り離し、社会体育施設等で行ってほしい	部活動は学校と切り離れた方がよい	わからない
顧問	11.1%	48.1%	19.8%	19.1%	1.9%

⑦は顧問を対象に「今後の部活動についての考え方」を調査したものである。県全体では表の通りであるが、沿岸部や山間部の学校では学校主導での部活動推進を望む回答が7割強と多く、生徒にとって部活動が必要であることが分かる。

⑧ 指導で困っていることや大変なこと (顧問回答 複数回答可)

	顧問
多忙で、自分や家族の時間が持てない	① 50.6%
大会やコンクールの引率が多すぎる	21.9%
大会成績などのプレッシャー	11.0%
部活動での生徒指導に負担を感じる	19.1%
部活動での技術指導の負担を感じる	② 42.3%
保護者会やスポ少活動など、部活動以外に関わらなければならない活動が多い	27.6%
保護者やコーチ、外部指導者などとの良好な関係作り	④ 29.8%